

2014年10月26日 主日礼拝

説教「過越の夜」

出エジプト記12章1-14節

【あなたがたの年の最初の月】

「この月をあなたがたの月の始まりとし」(2)とあります。過越のできごとはイスラエルの歴史の中で、もっとも重要なできごとです。エジプトで奴隷になっていたイスラエルを、神さまがあわれんでくださいました。イスラエルを救うまでは、あきらめることがない神さま。十の災いは、パロがどれほどじゃまをしても、神さまのあわれみをせきとめることはできないことの証明でした。

ますます心をかたくなにするパロ。その結果、人であれ、動物であれ、長子が滅ぼされてしまいました。そしてイスラエルが救われました。この大きなできごとを記念するために、その月から一年を始めることになりました。過越のできごとを忘れないように。過越のできごとに現れた神さまのあわれみを忘れないように。

【滅ぼすためではなく】

けれども、エジプトを滅ぼすのが神さまの目的ではありませんでした。神さまは一撃で、パロを殺すことをなさいませんでした。簡単にできたはずなのに。そうではなくて、神さまは何度もモーセを遣わされたのです。

パロは、心をかたくなにするのではなく、イスラエルを解き放つべきでした。そればかりではな

く、自分たちも神さまのあわれみを受け入れるべきでした。ところが神さまを拒否し続けたために、ついに、神さまはエジプト中の長子を殺さなければならなくなったのです。

エジプト人も、よいことだと思って、イスラエルの男児を殺したわけではありません。イスラエル人を恐れたのです。イスラエル人に支配されて、ひどい目に合わされることを恐れたのです。それは、罪と言うよりも弱さ。弱さが罪を呼び込んで、弱さに便乗する罪の支配を許したのです。

けれども、神さまはこのような支配から、私たちに自由にすることがおできになります。神さまを知る人は、罪の支配を恐れる必要がありません。神さまを知ること。神さまのあわれみを知ること。神さまのあわれみを受け入れること。そこに救いがあり、神さまのようにあわれむ生き方があるのです。

【過越の小羊】

「イスラエルの民の全集会は集まって、夕暮れにそれをほふり、その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける」(6-7)とあります。羊には何の罪もありません。なぜ羊が人間の身代わりになるのか。おかしいことです。理屈が通らないことです。けれども理屈を通すというなら、イスラエル人も、だれひとりさばきをまぬがれません。イスラエルとエジプトには、なんのちがいもありません。みな、神さまの前に立つことができない罪人。

だから、ほんとうは羊の血なんかで、ゆるされるはずはないのだけれども、神さまが、それでよいことにしてくださったのです。

けれども、罪の過越は、本当はあり得ないこと。罪人をさばかないことは、あり得ないことで、いつかはちゃんとしなければならぬことです。だから、このときの過ぎ越し、見過ごしは、言ってみれば、ツケのようなものです。いずれ払わなければならない負債、借金が残りました。神さまは、イスラエルのために借金を負ってくださいました。いつかは、このつけを払わなければならないことを覚悟の上で、借金してくださいましたのです。その借金を返してくださいましたのが十字架。主イエスの十字架です。

私たちが罪から守るのは、主の恵み。中でも、「みことば」と「仲間との交わり」です。これらの恵みが私たちに十字架を指し示すのです。

【神ご自身の血】

「わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう」(13)とあります。この血は、神ご自身の血。人となられた神ご自身が流してくださいました血。今も福島に、東北に、苦難は続いています。けれども、そこでも過越の血が語られています。過越の血が牧師たちをささえ、クリスチャンたちを支えているのです。私たちもこの血によって支えられています。この大きなあわれみを、いつも忘れないで、この大きなあわれみを知っているたがいを喜び合いましょう。